

ハイチ民衆史（一七九一―一九九一）ートゥサンからアリスティドへー

「われわれハイチ人にとってブードゥー教は文化の根源（ルーツ）です。……われわれの文化からそれを切り離してしまうことは、われわれ自身を殺すことになるのです」。（アリスティド大統領）〔一九九一年八月一三日TBS放送「ギミア・ぶれいく」番組より、青木訳〕

はじめに

一七九一年八月、仏領サンドマングにおいて黒人奴隷による蜂起が起こり、やがてトゥサン＝ルヴェルチュールやデサリーヌなど、多くの英雄が輩出し、そして名もない無数の黒人奴隷や逃亡奴隷の活躍により、一二年余に及ぶ内戦やフランス・イギリス・スペインによる干渉戦争を戦いぬいた末に、一八〇四年一月独立が宣言され、ここにハイチ〔先住民の言葉で「山の多い土地」を意味する〕が誕生した。それはまた、近代世界システムにおいてカリブ海域、とくにサンドマングを核として繁栄の極にあった奴隷制砂糖プランテーション社会の衰退の始まりでもあった。

それからちょうど二〇〇年後の一九九一年二月、「解放の神学」系のJ・B・アリスティド神父が大統領に就任した。「改革と民主主義のための国民戦線」候補として急遽出馬したアリスティドは、クレオール語で「洪水」とか「雪崩」を意味するラバラス現象を引き起こしつつ、民衆パワーの下からの盛り上がりを背景に、国際監視下の一九九〇年一二月選挙では投票総数の七〇パーセント近くを獲得して圧勝したのである。それは、「ベベ・ドック」つまりジャン＝クロード・デュバリエを国外逃亡に追い込み、父子二代、二九年に及ぶ独裁体制に終止符を打った一九八六年二月、そしてアブリル軍事政権を辞任に迫り「デュバリエなきデュバリエ体制」に痛撃を与えた一九九〇年三月に象徴されるような、一連の民衆運動の高揚の総決算でもあった。

本稿は、これら二つの変動の間の二〇〇年を民衆史の視点から、より具体的には社会経済的変動を背景にハイチ民衆がいかなる過程を経て自らのアイデンティティを確立しようとしているのかを、考察しようとするものである。その場合、従来のカリブ研究を「カリブに関する著述家たちはつねに……西欧文明にのみ自らを関連づけようとし、決してカリブの歴史との相関のもとで自己を捉えようとはしない」（一九六三年）と批判し、「つねに搾取され虐待されるような客体としてではなく、自ら大規模な行動を起こし、自分たちの必要のためには他の人々をも指導するような主体的存在」（一九八〇年）としてハイチ革命やトゥサンを描こうとしたC・L・R・ジェームズのカリブ史論（「トゥサン＝ルヴェルチュールからカストロへ」）の分析枠組みを参考にしたい。



ジェームズによれば、ハイチ革命は、砂糖プランテーションと黒人奴隷制とにより規定されてきたカリブの民衆が「はじめて西インド人〔カリブ海人〕としての一体感を抱くようになる」転換点に位置する。そして、それ以後のカリブ史は、①一九世紀期、②戦間期、③戦後期に区分される。

第一の時期に当たる一九世紀のカリブは奴隷制廃止の世紀であり、ハイチを含めて解放された黒人民衆はプランテーションを離れ、自給的小農経済に避難し、アフリカ的生活を再現しようとしたが、知識人を含むエリートたちは、ヨーロッパの知識人からは冷笑を買いながらも、ヨーロッパ文明の模倣に努めた。

やがて、世紀転換期から戦間期にかけて、カリブ海域は、ホセ・マルティらによる独立運動にもかかわらずプラット修正により米国の保護国と化してしまったキューバに代表されるとおり、同地域を裏庭ないし庭池視する米国の膨張主義の前に数多くの挫折を経験するところとなった。その挫折の中から、知識人らエリートたちは、それまで軽蔑の対象でしかなかった、言い換えるならば彼ら自身の「裏庭」的な存在だった黒人たちの生活や文化に目を向けるようになったのである。つまり、エリートが民衆を発見する時期に当たる。しかしながら、彼らエリートの意識は非常に屈折していた。そのため、彼らは、いわば「アフリカ回り」で民族的アイデンティティを追求しようとした。それまで西欧型の教育を受けさせられてきた彼らは「自分たちが自由で自立した人民であることを自覚するより前に、アフリカのものはすべて本来的に劣等で退廃している、という烙印を、自分の心の中から払拭する必要があった」のである。その具体的な思想的表現がエメ・セゼールやサンゴールら、アフリカやカリブ海域のフランス領植民地出身のパリ留学生を中心とするネグリチュード運動であり、政治社会的表現がジェームズ本人やパドモアらのパン・アフリカ主義であった。

そして戦後期は、それまでの民族的アイデンティティが「民族的事実」となる時期である。理解しにくい言い回しではあるが、一つには、知識人エリートに替わり民衆が主役となっていく。また一つには、ジェームズ自身は明示的には指摘していないが、アイデンティティの基軸がネグリチュード（黒人性）からアンティリャニテ（アンティル諸島性）、さらには「クレオリテ」（クレオール性）と呼ばれるものへと転換していくのだった。

このような分析枠組みに立てば、カリブ海域でいち早く独立を達成したハイチ民衆の二〇〇年は、どのように描くべきなのだろうか。

一 植民地期―征服・植民・革命―

一四九二年一二月、ハイチは、クリストバル・コロンのにより「発見」された。この島は、彼によりヒスパニオラと「命名」され、以後、スペインにより植民地化されていった。そして、数十万といわれる先住民、つまり征服前夜に主としてマニオク芋を栽培し首長制諸国家を形成していたタイノ系アラワク人を中心とする人々も、スペイン人による略奪経済のための苛酷な鉱山労働とヨーロッパ人のもたらした疾病の犠牲となり、数十年のうちにほぼ絶滅させられた。それと同時平行的にアフリカから根こぎにされた黒人たちが奴隷

として輸入されるようになった。やがて一六九七年、同島の西側三分の一は、仏領サントマング〔現ハイチ〕となった。その後、ハイチは、典型的な奴隷制プランテーション植民地として開発され、革命前夜には「アンティルの真珠」と称されるほどの富を、砂糖生産やコーヒー生産を通じてフランス本国のために生むようになっていた。

革命前夜、このプランテーション植民地を構成していた人々は、四万人の白人、二万八〇〇〇人の有色自由人（その大半がムラートと呼ばれる混血）、そして四五万二〇〇〇人の黒人奴隷であった。したがって、マルティニク、グアドループそして英領ジャマイカをも凌駕する、当時最大の黒人奴隷制社会だったのである。また、奴隷制社会とは、エメ・セゼールの表現を借りるならば、「等級制というよりも、一つの存在論そのものであった。……頂上には（まったく語義どおりの存在としての）白人がいて、底辺には法的人格もなく動産扱いされ、まさに無といえる黒人がいる。しかし、このすべてと無との間に、恐るべき中間一つまりムラート・有色自由人一がいた」のである。

しかしながら、黒人奴隷たちはまさに搾取され抑圧されるだけの客体ではなかった。さまざまな形で抵抗する主体でもあった。ハイチ黒人奴隷の歴史はまさに、当初から一貫して抵抗の歴史、「マロナージュ」と呼ばれる逃亡奴隷化の歴史であった。一五〇一年ヒスパニオラ島に連行されてきた最初の黒人たちはすぐに逃亡し、一五〇三年には反乱を起こした。そして、先住民の首長エンリケがバオルコ山中にたてこもり抵抗した一五一九―一三三年間には多数の黒人逃亡奴隷が彼と行動をとともにしたのだった。一五二二年には製糖所の掠奪やプランテーションの襲撃が起こった。それ以後三〇〇年にわたって、「奴隷制に反対し、自由を希求する」逃亡奴隷による反抗は止むことがなかった。「黒人が毒殺という罪を犯すとしたら、その究極の目的は自由の獲得である」と証言したメドール（一七五七年）、マルムラード地区で呪物を使いながら独立を説いたジェローム（混血）やテレマックたち（一七八六年）は誇り高い逃亡奴隷、奴隷革命の先駆者たちであった。

もちろん逃亡奴隷となるよりもプランテーションに踏みとどまった黒人奴隷のほうが数的にははるかに多かったであろう。彼らに対しては、キリスト教をはじめとする文化的同化が日常的に強制されたはずである。しかし、奴隷主と奴隷との間のコミュニケーション手段として「発明」されたフランス語系クレオール語はやがて、アフリカでは部族や社会、言語を異にしていた黒人奴隷仲間をサントマングにおいて連帯させる道具となり、またキリスト教とアフリカ系の宗教とが融合したブードゥー教は、ついには植民地政府が集会そのものばかりでなく、その踊りや太鼓の使用にまで禁止令を発布せざるをえなくなるぐらいに、黒人たちの抵抗の文化・アイデンティティの基軸へと発展していったのである。

また、社会経済的にもプランテーション植民地としていびつな開発を強いられたサントマングは、「排他体制」と呼ばれたフランス本国の重商主義的規制により、プランテーション植民地として「発展」すればするほど食料供給問題が深刻になるというジレンマに陥った。このジレンマを緩和するためには、植民地政府は、奴隷たちによる「奴隷菜園」における食料生産や「日曜市」からの食料流通にも依存せざるをえなくなるほどだったのであ

る。このように、プランテーション社会内部においても黒人奴隷たちは、身分的には解放されてはいなかったものの、文化的にも社会経済的にも自律性を強めていったのである。

そして、フランス革命勃発の約二年後の一七九一年八月一四日夜、ブードゥー教のパパロア（高位司祭）であり、逃亡を常習にしていたジャマイカ生まれのブックマンは、カイマンの森で、ブードゥー教の呪文を唱え、クレオール語で「われらに光をもたらす太陽を創造し、波を起こし、嵐を鎮める神は、雲の陰からでもわれらを見守り給う。……白人の神は悪事を唆すが、われらの神は善行を求め給う。われらの味方である神は、不正への復讐を命じ給う。……われらの涙の源泉である白人の神の象徴〔十字架〕を捨て、われらすべての胸の中に語りかける自由の声に耳を傾けよ」と、激励した。その一週間後、ハイチ革命は開始された。

二 一九世紀期―独立と「黒い肌のフランス人」像―

一八〇四年に独立宣言したものの、新生ハイチの前途は多難だった。荒廃した国土はもちろんのこと、ハイチの独立がヨーロッパ列強のみならず隣国の米国にとっても祝福されざる独立だったことは、どこからも承認を得られず、またヨーロッパ列強間ではナポレオン戦争の戦後処理を定めた一八一四年のパリ条約によりヒスパニオラ島の帰属問題は革命前の状態に復帰すること、つまりそれぞれフランスとスペインに返還されることで合意を見たのであり、そして米国は独立を達成したばかりのラテンアメリカ諸国に対してシモン・ボリーバルが呼び掛けたパナマ会議（一八二六年）へのハイチの参加に横槍を入れた



クリストフが対仏戦用に備蓄した砲弾 撮影：神代修

のである。本格的な工業化時代を迎えようとしていた欧米列強が奴隷制度をまだ容認していたことが、奴隷解放を達成したハイチ革命への恐れとなったことは想像に難くない。一八二五年ハイチは、フランスから承認を得て国際的孤立を脱するため一億五〇〇〇万フランにのぼる「損害賠償」という条件を飲まざるをえなかった。

一九世紀のハイチ民衆史を特徴づけたのは、新政府にとっては余儀なくされたという色彩が濃厚とはいえ、ラテンアメリカ史上最初の土地改革の実施である。トゥサンやデサリーヌ、クリストフら、奴隷革命指導者の多くは、「奴隷制なき砂糖プランテーション社会」の再建を目指したが、自らの手で解放を勝ち取った黒人大衆は、奴隷革命の進展とともに、荒廃した農園の土地を占拠し、かつてプランテーション内の奴隷菜園で、あるいは逃亡奴隷として集団で自給生活を送っていたときのように、自給用作物を栽培し始めた。南部を地盤とするペションは、自身ムラートであり、また北部のクリストフと比較して支持基盤が弱かったこともあり、早くから土地の再分配に踏み切るようになった。一八〇七年四月には、土地売買の下限面積を一〇カロー（約一二ヘクタール）まで引き下げ、さらに一八〇九年には、退役将兵に対する五ないし二五ヘクタールの土地の譲与を開始した。その結果、南部では一八〇七―一八年間に一五万ヘクタール以上もの土地が分配され、国有地の多くもまた売却された。プランテーション労働者にも制限つきながら移動の自由が認められたため、遠隔地や丘陵地を占拠して農耕を開始する者も輩出するようになった。

こうして、『甘さと権力』の著者ミンツが「再構成された農民」と呼ぶところの再農民化の過程が広範囲に起こり、総人口の八五ないし九〇パーセントの人々がなんらかの形で、私有であれ、分益小作であれ、あるいは国有地の占拠によってであれ、自分の土地を確保するようになった。このような社会経済的安定のうえにラクー（lakou）と呼ばれる比較的広い土地の中に出自を同じくする数家族が展開する「大地と共同性に強調点を置く民俗宗教」〔荒井〕としてのブードゥー教が発展するのは、まさにこの時期のことである。

実際、一九世紀前半、ラテンアメリカ経済史家のフルタードによれば、ハイチ農民は「ラテンアメリカ諸国の中で最高の生活水準を享受していた」という。とはいえ、彼ら貧農層を形成した黒人大衆は、完璧に自給することが出来たわけではなかった。農村では、地主制が残存・確立していったし、一〇カロー以上、ときには五〇ないし一〇〇カローにも及ぶ地主的土地所有も見られた。また、ハイチ経済全体を見ても、中心作物こそ砂糖からコーヒーに転換したものの、また世界経済に占める地位は非常に低下したものの、モノカルチャー・モノエクスポートという、近代世界システムの中の周辺にとって特徴的な基本的性格には変化がなかった。一九世紀を通じてコーヒーは国民総生産の二〇ないし三五パーセント、輸出額の七〇パーセントを占めるに到り、プランテーションのみならず農民層によっても手軽で有利な換金作物として栽培されるようになった。そのため、新エリートたちは、農民的土地保有という点では妥協しはしたが、財政政策を通じて、つまりコーヒー輸出に対する課税をはじめ多種多様な課税や労働力調達を通じて、農民搾取のメカニズムを作り上げていったのである。

一方、民族的アイデンティティ探求の点では、一八〇四年ハイチの独立を達成したデサリーヌは、一八〇五年憲法においてハイチを「すべてのアフリカ人およびその子孫のための祖国」と規定し、その黒人主義を高らかにうたい上げた。また、同一二条により、白人には不動産を所有することを禁止し、それまでフランス人をはじめ白人地主によって独占されてきた土地をすべて国有化した。このような黒い肌に対する誇りそのものは、混血エリート層によっても否定されることはなかった。

しかしながら、あるいはそのような誇りを前提としながらも、混血を中心とし、少数の黒人を含む新エリート層には西欧指向、特にフランス指向が強かった。

一八〇四年の独立を見ることなく、フランスのジュラ山中で非業の死を遂げた革命英雄、元黒人奴隷のトゥサン＝ルヴェルチュールでさえ一八〇一年サンドマング「憲法」ではブードゥー教ではなくカトリックを「唯一の表明された宗教」〔浜訳〕と規定するなど、ハイチの未来の範をフランスに求めたのである。ましてや混血の多くはフランス人を祖父や父に持ち、中には初期大統領のペションやボワイエのようにフランスに留学した経験を持つ者もあった。フランス語を流暢に操り、すでに革命前夜には「プランテーションの三分の一、奴隷の四分の一」を占めると豪語していた混血エリート層にとって、「崩れたフランス語」のクレオール語を話す文盲の黒人層よりも、フランスやフランス文化に親近感を抱き続けたとしても、ある意味では不思議ではなかった。また、エリートの仲間入りを果たした、ごく少数の黒人層にしても、フランス語を読み書きし、カトリックを信仰することは、クレオール語を話し、ブードゥー教を信仰する黒人大衆との違いを表現する直截的な表現手段、ステータス・シンボルともなったのである。そういう意味で、エリートにとってフランス指向は自らの階級利害の表現であった。

もちろんフランスはハイチにとりかつての植民地宗主国であり、抑圧と搾取の元凶であった。しかしながら、新エリート層はこれらの責任を一握りのフランス人、つまり「コロン」と呼ばれた植民者に負わせることにより、フランスを免罪し、むしろフランスを人権宣言を發布し、他に先駆けて奴隷を解放した国民として規定することにより、自分たちのフランス指向をも正当化することが出来たのである。たとえば、ドロールは一八七〇年に次のとおり述べている。

「わが国は、フランスと長期の戦争を戦った。しかしそれでもなお、われわれがもっとも好きな国はフランスのままである。……フランス人は躍動する魂と人権の言葉話す。……われわれの若い国は、新世界におけるフランス文明の創始者となるだろう。」

ハイチの新エリート層は、いわば「黒い肌のフランス人」となることを目指していたといえる。それは、ある種の両義性、ある種の分裂を内包していたし、差し当たり自分の土地を確保し文化的にも自律的なアフリカ的世界に没入していたハイチ民衆とは無縁な理想像であった。つまり、一九世紀から二〇世紀にかけてハイチにおける民族的アイデンティティは二重に分断されていた。一つは黒人主義とフランス指向との併存、他の一つはエリートと民衆への断片化である。

三 戦間期—占領とネグリチュード—

ハイチの戦間期を特徴づけるのは、一九年に及んだ米国による占領（一九一五一三四）であろう。世紀転換期以後、米国はモンロー・ドクトリンの拡大解釈、「棍棒外交」、「ドル外交」、「伝道外交」等により、ラテンアメリカ、特にカリブ海域に対して積極政策を展開していった。とりわけ一九一四年のパナマ運河の開通はカリブ海域にとり決定的な重要性を持った。この時期、米国は、債務の取り立てや自国民の生命財産の保護を名目に中米・カリブ地域に頻繁に軍事介入しており、ドイツの影と政治的不安定から守るべき戦略的要地のハイチもまたその例外ではなかった。一九一五年七月ハイチに侵攻した海兵隊は首都ポルトープランスを占領し、以後米国は次々と傀儡政権を仕立てていった。そして一九一八年には新憲法を制定させて、一八〇五年以来禁止されてきた外国人による土地所有を可能にした。その結果、確かに米国の投資は一九一五一三〇年に三倍になり、ハイチ・アメリカ砂糖会社のような大企業が進出してきはしたが、その反面、多数の農民が肥沃な土地から追い出されたし、また占領期の米国の政策によりハイチの近代化が達成された、と評価することも困難である。ある意味ではハイチの国内矛盾、たとえば首都と地方との格差は一層拡大した。

このような社会経済的背景のもとで、知識人エリートたちの中には、これ以後強まる米国的生活文化の押し付け・同化圧力から自衛するために従来のフランス指向を徹底させようとする者もあった。「醜い米国人」像がステレオタイプ化し、寛容・非暴力・教養・優雅等の項目がフランス人の属性とされたのに対して、米国人には人種主義・暴力的・野卑・物質主義等の属性が割り振られた。つまり、ハイチ文化のなかのフランス的要素を強調することにより、「アングロサクソンの野蛮主義」に対する優越を感じ、それによって抵抗の姿勢を示すとともに、ハイチ民衆との関係で危うくなりかけたエリートとしての地位を保全しようとしたのである。たとえば、米国は、従来のフランス語教育や古典重視の教育に替えて英語教育や職業教育を奨励しようとしたが、ハイチは、一九一八年憲法の中に「フランス語が公用語である。行政・司法においてはフランス語を使用しなければならない」（第二四条）という一文を挿入させるのに成功した。ただし、それまでは書き言葉としてのフランス語の地位はこういう規定すら必要のないくらいに揺るぎなかったことも事実であった。ともあれ、教育大臣をも務めたベルギヤルドは、一九二三年に次の通り述べている。

「われわれの心の中にフランスが占めている場所を奪うことは、何者にも出来ない。われわれは血液と言語とによってフランスと結ばれている。それは甘美で堅い絆であり、われわれはそれを切断することなど望みもしないし、切断する能力もないのだ」。

しかし、実際に武器を取って戦ったのは、ハイチの中のフランス的要素とは無縁なはずの黒人民衆、農民たちであった。それは、カコ戦争と総称される、三波（一九一〇—一五、一九一八—二〇、一九二九）に分かれるゲリラ戦争だった。最盛期には戦闘員は二万ないし四万人にも昇ったが、武装は貧弱だった。そして、五万人ものハイチ人が戦死し、総人

ロ二〇〇万人のうち三〇万人が国を捨ててキューバやドミニカに逃れた、と伝えられる。特に有名なゲリラ指導者で、やがて国民的英雄となった者にペラルト（一九一九年刑死）がおり、ニカラグアのサンディーノの運動などと同等の歴史的意義を有する運動だったが、当時ハイチはラテンアメリカ諸国内からも国際的支援を頼ることが出来ず、一方的に押しまくられた。しかしながら、米国により復活されたコルヴェ労働（道路建設等のための労働力の無償供出）やアグリビジネス産業の進出により生活基盤を脅かされた農民たちは、ゲリラ側を支援しつづけたのである。

その結果、フランス指向を止めて、ハイチの中の黒人的要素に抵抗の基軸を求め、民衆文化つまり農民文化を見直そうとする知識人エリートも現われた。その代表がジャン・ブリス＝マルスである。彼は一九二八年に『おじさんは、こう語った』を刊行し、たとえばクレオール語について次のように評価した。

「われわれのクレオール語は、かつて主人と奴隷が意志を伝達しあう必要のために生まれた集団的創造物である。……差し当たり、それはわれわれ〔エリート〕とわれわれの民衆がその思想を表現するために使用できる唯一の道具である。……われわれの口頭伝承はクレオール語により伝達され、存続され、そして現存するのである。そしてわれわれはいつの日か、われわれと人民とを二つの異なる、ときには対立する集団に区分しているギャップを、クレオール語が埋めてくれることを希望する」。

そしてハイチ人の九割が話し信仰するクレオール語とブードゥー教を、つまりアフリカの遺産を再評価するとともに、そのような明白な事実の受け入れを頑なに拒否し、フランス的規準によってハイチの現実を判断しようとするエリートたちの「黒い肌のフランス人」像を批判したのだった。ここにハイチ民衆は知識人エリートの一部によってようやく、いわば「再発見」されたのである。

なお、この運動は、一九三〇年代フランス本国の首都パリで、エメ・セゼール（マルティニク）やサンゴール（セネガル）など、植民地出身の留学生たちによって開始され、戦後期にかけて大きな影響を及ぼしたネグリチュード運動の先駆でもあった。

四 戦後期一二つのデュバリエ体制ー

ブリス＝マルスを先駆とし、戦間期に生まれたハイチのネグリチュードは、やがてさまざまに分岐していった。

たとえば、一九〇七年首都で混血系の大地主の家に生まれたジャック・ルマンは、ヨーロッパ留学、ハイチ共産党の創設、民族学研究所の設立、その間数度の逮捕歴など、波乱に富んだ人生を送ったのち一九四四年夭逝したが、一九四一年「迷信撲滅運動」の名のものとブードゥー教攻撃に反対したように、ハイチの貧困問題を人種問題としてよりも階級問題として理解する一方、黒人系労働者が「アフリカの記憶」を超克して白人系労働者とも連帯し、「被抑圧者の宇宙的人種」への道を探ることを希望した。

また、一九二二年ゴナイーヴで生まれた作家の J・S・アレクシはハイチ文化の中の黒

人的、アフリカ的な要素を過度に強調する傾向を批判し、さまざまな民族的・地方的影響の合流こそハイチ的伝統を形成してきた、と指摘した。つまり、彼にとってハイチ文化とは、先住民系文化、アフリカ系文化、ヨーロッパ系文化の不断の交流によりハイチ民衆が作り上げてきた「一つのナショナルな文化」なのであった[加藤]。こういう立場こそ、ジェームズが強調した「故郷喪失者」としての共通性を基軸とする汎カリブ的連帯、ネグリチュードからアンティリャニテ、クリオリテへと発展する可能性を秘めていたものである。しかしながら、アレクシは、一九六一年ソ連訪問からの帰途、キューバよりボートで上陸後反政府蜂起を試みたが、逮捕され処刑された。 実際、戦後期のハイチのネグリチュードを先導したのはルマンやアレクシのような潮流ではなく、それとは対照的な立場に立ち、一九三八年『グリオ』(西アフリカの口頭伝承者という意味のフランス語) 誌を創刊したグループとその一人、デュバリエの「黒人主義」(noirisme) であった。彼こそ一九五七年から三〇年弱に及んだ、親子二代にわたるデュバリエ体制を確立したその人であり、その独裁体制の下で、豊かな可能性に満ちていたハイチのネグリチュード運動もまた非常に矮小化されていったのである。

デュバリエが唱えた「黒人主義」は一九四六年に刊行された『ハイチ史を通してみた階級問題』(ドニとの共著) の中によく現われている。ハイチ文化の中のアフリカ的要素を過度に強調した同書によれば、混血エリートの伝統的優越性は経済的理由によるよりも民族的、人種的な現象であり、黒人系中間階級は自らの権利を主張し、混血の手にあるヘゲモニーを打破すべきであるとした。一九六四年の国旗の変更を例にとれば、ハイチの国旗は独立以来、宗主国フランスの三色旗から白い部分を削除した図柄だった。青は黒人、赤は混血を象徴する、と解釈されていた。これをデュバリエは黒と赤に変え、しかも黒を赤の上に持ってきたのである。

こういうものこそ、ジェームズが「低俗な人種主義」として強く批判したものではあるが、米海兵隊による占領期のアメリカ南部流の人種差別的な混血優遇政策や混血系のレスコー親米政権(一九四一―四六) 等の時代に反米・反混血感情を募らせつつあった黒人系、特に台頭しつつあった黒人系中間階級には受け入れられやすい政治宣伝であった。

デュバリエ自身、一九〇七年、黒人系下層中間階級の家生まれ、黒人系中間階級の子弟として典型的な社会的上昇の階梯を歩んでいった。リセ卒業後医学の道を志し、医師免許を取得した彼は、後年「パパ・ドック」と呼ばれるようになる。一九三九年に混血系の富商の娘で看護婦だったシモーヌと結婚したデュバリエは、ポピュリスト系の「労農運動」党を離れて穏健派の黒人系エスティメ政権下で厚生相や労働相を務めたのち(一九四六―五〇年)、ハイチ最初の普通選挙となった一九五七年九月の大統領選挙(不正選挙)に出馬し、エスティメ「革命」の継承を唱えて幅広い黒人層の民族主義的感情に訴えたことと軍部の支持により当選を果たした。しかしながら、デュバリエは軍部の傀儡に終わるつもりはなかったし、就任当初のポピュリスト的な姿勢を取りつづけることもなかった。権威主義体制、さらには独裁体制の確立へと邁進するのだった。そのためには、伝統的に政治

的不安定の一要因だった軍部に代わる、そして大統領にのみ忠誠を誓う暴力装置として、いわゆるトントンマクト（クレオール語で、民間伝承上の子供の誘拐魔の意味）を一九五八年に発足させ、六二年には正式に「国家保安志願隊」に編成し、都市の黒人系ルンペン・プロレタリアートにも下級職を与えた。また、カトリック教会に対しては、外国人神父を追放したり、ブードゥー教のヒエラルキーをインフォーマルな支配ネットワークの中に抱き込んだりすることにより、牽制した。しかし、デュバリエ体制は基本的には、特に都市の黒人系中間階級を体制内に取り込みつつ、占領期に動揺した黒人系・混血系エリート間の均衡を回復しようとしたのであり、国内的にも国際的にも根本的な変更を体制側に迫るものではなかったし、六〇年代は経済成長面でもほとんど停滞したままだった。特に農村部では地主やトントンマクト、そしてブードゥー教司祭を通じて既成秩序の維持をはかったため、大半の黒人民衆は、「黒人主義」を標榜するデュバリエ体制の下でも実質的には排除され続けたのだった。

またカリブ史の中で見るならば、この時期、重要な転換点となる出来事が起こる。一九五九年のキューバ革命がそれである。民族民主革命として出発し、同年バチスタ独裁政権を打倒したカストロらの革命政権は、六一年には米ソ冷戦体制の下、社会主義への移行を宣言した。このキューバ革命は、ジェームズやウィリアムズによって人種間平等やカリブ・アイデンティティへの道において高く評価されている。しかしながら、一九六四年に終身大統領制を確立するデュバリエ政権は、ドミニカのトルヒーヨ独裁政権崩壊（六一年）後のカリブ海域において「反共の砦」としての役割を引き受けることにより、特に一九六六年以降米国の支援ないし黙認を取りつけて命脈を保っていくが、その結果、カリブの民衆の希望には背を向け続けたのである。

一九七一年パパ・ドックが死亡し、ベベ・ドック、つまりジャン・クロードの時代となる。彼は、一九七七年ジャン・クロード主義を宣言し、パパ・ドックの「政治革命」に対して「経済革命」を目標に掲げることによって旧路線からの一定の離脱を指向しようとした。端的に言えばそれは、ハイチを国際的に開放し、米国などから援助や投資を引き出して近代化・工業化を図ることであった。そのためには支持基盤を変えることも躊躇しなかったし、一九八〇年五月混血系のベネット財閥の娘ミシェルとの結婚が端的に象徴していたように、パパ・ドック時代の「黒人主義」というスローガンは実質的のみならず名目的にもますます色褪せていった。それに代わり、混血系のテクノクラートたち（層は薄かったが）が重用され、フランスにかわり米国化の傾向が加速されたり、数量的には七〇年代には人口増加を上回る成長率を残したりしたが、結局はエリート間の分裂が深まり、ベベ・ドックらの腐敗体質や金権体質、そして恐怖政治が強化されるのみだった。

その間、エリート層が富裕化した反面、開放政策による米国からの援助や輸入による無償ないし安価な米・食用油・大豆・粉ミルクなどの流入は、一面では小農によるトウモロコシや米・キビ類の生産基盤を掘り崩すという結果を招いたし、牛や山羊の飼育もまた、対岸の米国マイアミからの鶏肉の流入により駆逐されようとしている。とりわけハイチ農

民の生活の窮乏に拍車をかけたのが八〇年代初頭のアフリカ豚熱の騒ぎだった。一九七八年隣国のドミニカ共和国でアフリカ豚熱が流行し、八一年には米国やカナダからの圧力により、ハイチのすべての豚（小農にとってささやかな貯蓄手段だった）が屠殺されてしまった。代わりに、米国産の白豚が導入されたが、土着の黒豚とは異なり、飼料や施設の面で相当額の投資が必要なため、小農の助けとはならなかったのである。また、現在では輸出額の三分の二を野球ボールなどの軽工業品が占めているが、これは「カリブの中の台湾化」を目指したベベ・ドックの開放政策に伴う低賃金維持に基づく対米従属的な工業成長の結果にすぎず、したがって雇用創出効果は非常に限定されており、首都への人口集中とスラム化（現在では一三〇万人を数え、ハイチ人の五人に一人が居住するが、首都らしい都市的機能はほとんどない）、そして大量の失業者群を惹起しただけであった。

ハイチは今日「中南米のアフリカ」と呼ばれ、世界の最貧国のひとつに甘んじている。たとえば、総人口は、六四〇万（一九八九年）を数えるが、人口一人当たりの国民総生産は三八〇ドル（八八年）にすぎない。出生一〇〇〇人当たり九四人が一歳未満で死亡し、五歳未満では計一三三人が死亡する。そのため出生時の平均余命は五五年（一九年）にすぎない。そして、人口の七二パーセントが農村で暮らしている。少々古いが、一九七一年センサスによれば、三ヘクタール未満の小農部門が耕地の六二パーセント、農民の八八パーセントをしめていた。それ以後、零細化と森林破壊とは強化されこそ、歯止めがかかることはなかった。

人口的損失もまた莫大である。このデュバリエ独裁の二九年間に二万ないし五万人が政府の手で殺害され、五人に一人が海外生活を余儀なくされているという。つまり、パパ・ドックの独裁が強化されるにつれてまず過半の専門職業家が亡命・移住し、そして、ベベ・ドックの開放政策が破綻し、にもかかわらず農民経済が解体する中、八〇年前後を頂点に「ボート・ピープル」と呼ばれる経済難民群が続出した。こういう独裁と貧困の中、ハイチは一九八〇年代を迎えた。

五 一九八〇年代のラテンアメリカと「解放の神学」

ラテンアメリカの一九八〇年代は、今日「失われた一〇年」と形容されたりするほどに、累積債務問題をはじめさまざまな問題が噴出した一〇年であった。しかしながら、それは同時に一九七九年のエクアドルを皮切りにして一九九〇年のチリに到るまで、一九六四年のブラジルを端緒として一世を風靡した各国の軍事政権が倒れ、民政復帰が実現した「再民主化」の一〇年でもあった。この再民主化と呼ばれる過程を下から支え、単なる民政復帰以上の意義をそれに付与したものこそ、一九七〇年代後半から台頭し、「運動内部における底辺民主主義の実践を重視し、政党や国家に対して自律性を主張する」[大串] ような、多様な、新しい社会運動である。具体例としては、フェミニズム運動・エコロジー運動・人権運動などの欧米型の運動に加えて、きわめてラテンアメリカ的な運動としてキリスト教基礎共同体やスラム住民による自治運動などを上げることができる。

なかでも、一九六二―六五年の第二バチカン公会議に始まるカトリック教会内部の革新運動は、経済的には六〇年代の輸入代替工業化政策および七〇・八〇年代の自由主義的開放経済政策の破綻により累積債務危機に見舞われ、政治社会的には軍事政権下の人権侵害に苦しみ、思想的にはキューバ革命の挑戦に直面したラテンアメリカで大幅な進展を見、ラテンアメリカ司教会議は、一九六八年のメデジン会議ではラテンアメリカ社会の現実を「制度化された暴力」による「罪の状態」と規定し、特に一九七九年のプエブラ会議では「貧しい人々を優先的に選択」した。この間、ペルーのグティエレス、ブラジルのボフなどを中心に、やがて「解放の神学」として知られるようになる、社会的実践を重視するラテンアメリカ独自の神学が確立されていくとともに、草の根レベルでは六〇年代初頭から、特にメデジン会議以後、ラテンアメリカ各地でキリスト教基礎共同体という「貧しい民衆によって構成される信徒主導型の小さな共同体で、解放の神学を体現したもの」[乗]が続々と結成されていった。むしろ、このような草の根運動がカトリック教会のヒエラルキーに革新を迫った、というほうが正確だろう。

デュバリエ体制下のハイチでは、テロを含む政治的抑圧のために、政党や労働組合などの伝統的運動団体は成長を阻止されてきた。植民地期以来つねに解放ないし抵抗の基軸となってきたブードゥー教もまた、デュバリエ体制側の支配ネットワークの中にそのヒエラルキーが抱き込まれたり、存立基盤である農民経済そのものが零細化したりしたために、民俗宗教としてのかつてほどの活力は喪失してしまっていた。ところが、それまでほとんどつねに既成秩序の側に与してきた上に、一九六六年外国人神父の追放によるハイチ化以後はデュバリエ体制を肯定してきたハイチ・カトリック教会が、八〇年代になると、新世代の革新的な宗教家の台頭によりハイチ民衆の希望を一身に担うようになるのだった。

まず、一九八二年九月、司祭に叙せられたばかりのアリスティドは、首都のスラムの一つ、ラサリーヌの聖ヨゼフ教会のミサで、「ロバだけが働き、馬は日向で跳ね回っているようなこの体制、責任ある人々によってわれわれに押しつけられた悲惨の体制」と体制批判し、やがて国外生活や数度の暗殺の危機を乗り越えてハイチ民主化の象徴、伝説的なカリスマ的指導者になることとなる。ついで、同年末のハイチ宗教家会議のシンポジウムでは、彼ら宗教家たちは、ハイチの現状を「分裂、不正義、悲惨、飢え、不安、失業、農民のための土地不足、家族の離反、不十分な教育制度」と規定し、それに対する自分たちの罪を認め、デュバリエ体制の犠牲となった人々こそキリストを代表するとした。そして一九八三年三月ハイチを訪問したローマ教皇ヨハネ＝パウロ二世は、「この国では何かが変わらなければならない」と訴え、このようなハイチ・カトリック教会によるデュバリエ体制の「宗教的非合法化」の動きを公認したのである。国連国際青年年に当たる一九八五年司教たちの呼び掛けに応じてハイチ中の数万の青年たちが「跪いて生きるよりも立ち上がって死にたい」「われわれこそ教会であり、教会はわれわれのものだ」と叫びながらデモ行進した。同年十一月、奇しくもハイチ独立を決議した開催地、地方都市のゴナイーヴのデモで軍隊の発砲により四人の生徒が死亡し、これを契機に地方青年の運動は反乱の様相を呈しつつ

地方から地方へと波及し、一九八六年二月には首都に及ぶこととなり、その結果、ベベ・ドックは米軍機で亡命を余儀なくされ、デュバリエ体制は崩壊したのだった。

ところで「解放の神学」運動は、他の新しい社会運動と同様に、単なる権力奪取よりも日常的な実践活動を重視した。その重要な活動の柱が、ハイチでも一九八〇年代初頭に二〇〇〇以上に急速に成長した、チレグリズ (Ti-légliz、小さな教会) と呼ばれるキリスト教基礎共同体を核とする協同組合づくりと識字運動だった。

たとえば、一九八七年七月五〇〇人もの犠牲者を出す舞台となったハイチ北西部の小さな町ジャンラベルにおける基礎共同体による協同組合づくりは次のような経過をたどった。デュバリエ体制下ジャンラベル地方を支配してきた一握りの地主、特にリュカス家は、一九七〇年代半ばからは援助物資の横流しや密輸に加えて、国有地や小農保有地を合法・非合法に、ときにはトントンマクートの助けを借りて集積していき、国際援助による灌漑事業の恩恵により肥沃な一大耕地と化した旧零細地では、首都や観光ブームに沸くバハマ諸島向けの野菜果物栽培により、莫大な利潤を上げるようになった。一方、僅かばかりの土地をも奪われた農民たちは分益小作農として収奪されながら生き続けるしかなかったが、一九八三年には、カトリック司祭のジャン＝マリー・ヴァンサンを中心にして自助組織を結成した。これがテタンサム (Tet Ansanm、頭を集めること) というクレオール語の名称で知られるものである。オルタナティヴへの道を探る民間協力機関の協力の下、自助努力と集団労働に基づき識字・保健・農業技術の面で成果を重ねることにより、組合員数は一九八五年までには最大勢力一万人を数えるようになり、リュカス家支配に対する最強の対抗勢力にまで成長した。そしてデュバリエ体制崩壊後の一九八六年五月には六九〇ヘクタールの土地の返還を求めて示威行進に出て、リュカス家との直接対決の色を濃くした。一九八七年七月、追い詰められた地主側は、「共産主義の脅威」というお決まりの口実により、歴史に残る虐殺事件を引き起こしたのである。

一方、首都のスラムではアルファ計画 (Misyon Alfa) と呼ばれる識字運動が盛んだったが、一九八六年九月シテ・ソレイユで活動中だったシャルロット・ジャックリーヌが警察・軍により自宅から連行され、行方不明となった。彼は、ブラジルの識字教育家パウロ・フレイレの、身近な現実の問題から文字や言葉を考えるという方針どおり、当時ハイチ社会の合い言葉となっていたデシュク (dechuke、後出デシュカジの動詞形) という言葉を教材に取り上げたことが、デュバリエ後の軍部主導の国家評議会によって「共産主義に毒された」反体制運動と敵視されたのである。

教会ヒエラルキーが「デュバリエなきデュバリエ体制」との和解を迫る中で、このような犠牲を払いながらも前進しようとする、このチレグリズ運動を中心とする、ハイチの新しい民衆運動が依拠するイデオロギーないし精神は、以下のようなものであった。

第一に、冒頭に引用したアリストイドの発言にあるようにブードゥー教をハイチ民衆のアイデンティティの不可欠の要素として肯定している。かつてブードゥー教はゾンビ伝説と相俟って、何か悪魔の仕業のように好奇の目で見られていたが、今日ではその特徴のひ

とつ、憑依現象も多くの宗教に見られる一般的な現象として、またそれまでのヨーロッパ中心からいかに「アフロ＝カリブ的な」キリスト教へと転化すべきかという課題の中で、捉え直されるようになっている。

第二に、彼らはクレオール語で実際に自らを表現しようとするし、アルファ計画にせよソレイユ・ラジオ放送にせよクレオール語をコミュニケーション手段とすることにより、デュバリエ体制の打破に大きな成果を上げた。いわば、六〇年前にプリスマルスが希望した役割を、いまやクレオール語が果たそうとしている。言語学的にもピジン語やクレオール語の研究が進むにつれて、それまで「崩れたヨーロッパ語」として一段低く見られていたそれらの諸言語も他の言語と同じく独立した言語と見なされるようになっている。

その結果、一九八七年憲法によりブードゥー教とクレオール語とが事実上公認された。これは、デュバリエ流の「黒人主義」によってはずいに実現しなかったことである。

そして第三のもっとも重要な要素は、伝統的な農民的アイデンティティの復活である。たとえば、デュバリエ後にデュバリエ主義の根絶という政治的メッセージを込めて使用されたデシュカジという言葉は本来「樹を地面から根こそぎ引き抜くこと」という意味のクレオール語であった。同じように解釈された唯一の革新派司教ロメリュスの言葉「Raché manyok, bay tè a blanch」（「マニオク芋を引き抜き、地面をきれいにせよ」という意味のクレオール語）もまた、農民の文化に根ざした表現であった。そして、それらを引き抜くためには協力して働く必要があった。たとえば、彼らの識字運動のテキストでは六人がかりでデシュカジに当たっていた。つまり、そこでは協働という概念が強調されており、さらにはコンビット（combite）というハイチ農村における四ないし一〇家族を単位とする集団労働の伝統が再評価され再活性化されているのである。

このようにクレオール語を主要な伝達手段とし、ハイチの農民文化や生活の伝統を再評価しながら、チレグリス運動は農村を中心に、地方都市やポルトープランスのスラム地区でも、新しい共同体づくりに邁進しつつある。この民衆運動はまだ歴史も浅く、ハイチ社会の主流を形成するほどの実力を蓄積してはいないものの、一九九〇年一二月の大統領選挙では予想を超える成果を示してきた。一九九一年の九月末に起きた軍事クーデターによりアリスティド政権は事実上崩壊したが、ハイチにおける市民社会の成熟を予想するのならば、仲間との連帯を第一義とし、国民の八割以上をしめる彼ら農民やスラム住民が、選挙という非日常的な場のみならず、日常的な政治・社会の中で主役となる日に期待するしかないのである。



ダブダブ（ハイチ都市民衆の交通手段）

撮影：神代修

(参考文献)

- 青木芳夫「C・L・R・ジェームズのハイチ革命論」(『ラテン・アメリカ論集』第二四号、一九九〇年)
- 同「ハイチ革命ノート」(『南欧文化』第一五号、一九九一年一月、参考文献欄参照のこと)
- 荒井芳廣「農民たちの世界—ハイチ農民の民俗とエリートの農民小説」(石塚道子編『カリブ海世界』世界思想社、一九九一年)
- G・アンティオプ「奴隷の生活史におけるダンス」(『黒人研究』第六〇号、一九九〇年一月)
- E・ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで』全二巻(岩波書店、一九七八年)
- 大串和雄「ラテンアメリカにおける社会運動の展開」(『山形大学紀要(社会科学)』第二一卷第二号、一九九一年)[『ラテンアメリカの新しい風』同文館、一九九五年]
- 加藤晴康「ハイチ革命の意義によせて」(『社会運動史』第一〇号、一九八五年)
- 同「ハイチの変動—デュバリエ体制の崩壊」(『ラテンアメリカ・レポート』第六巻第四号、一九八九年)
- C・L・R・ジェームズ、青木芳夫監訳『ブラック・ジャコバン』(大村書店、一九九一年)
- 浜忠雄「ハイチの独立と植民地支配の『遺産』」(『歴史学研究』第六二三号、一九九一年九月)
- 林正寛「ピジンとクレオール」(濱下武志ほか編『移動と交流』岩波書店、一九九〇年)
- ユニセフ『世界子供白書 一九九一年版』(一九九一年)
- 乗浩子「ラテンアメリカにおける解放の神学」(『帝京大学国際文化学科紀要』第三号、一九八九年)[『宗教と政治変動』有信堂、一九九八年]
- Leslie Bethell, ed., *Latin America since 1930: Mexico, Central America and the Caribbean* (Cambridge, 1990).
- Caribbean Quarterly*, Vol. 37, No. 1 (March 1991).
- Rene Depestre, "Hello and Goodbye to Negritude", M. M. Friginals, ed., *Africa in Latin America* (N.Y., 1984).
- James Ferguson, *Papa Doc, Baby Doc: Haiti and the Duvaliers*, rev.ed. (N.Y., 1988).
- Leon-Francois Hoffmann, "Francophilia and Cultural Nationalism in Haiti", Ch.R. Foster and A. Valdman, eds., *Haiti-Today and Tomorrow* (Lanham, 1984).
- R. M. Morse, ed., *Haiti's Future* (Washington, D.C., 1988).
- Gerard Pierre-Charles, ed., *Los movimientos sociales en el Caribe* (Santo Domingo, 1987).
- Amy Wilentz, *The Rainy Season: Haiti since Duvalier* (London, 1989).
- 追記:** 本稿は『歴史評論』第501号(1992年)に掲載された。ジェームズ『ブラック・ジャコバン』新装版が今夏、大村書店から刊行されるときには解説の一つとして収録される予定である。